

序論) 絶望によって神様を疑うことがある

- 困難な状況に置かれると、神様の存在や助けを疑うことがある。
- C.S.ルイスの例:「悲しみをみつめて」で神様を疑ったことを告白。
 - 最愛の妻ジョイの死後、彼は深い悲しみに沈んだ。
 - 「人の魂に何も残っていないとき、神が助けを与えることができない」と語った。
- 信仰深い人でも、絶望の中で神を疑うことがある。

1) なぜ救いがないように思えるのか

イザヤ 59:1-2

- 神の手が短いわけでも、耳が遠いわけでもない。
- 問題は人間側にあり、罪が神様との間を隔てている。

イスラエルの罪(イザヤ 59:3-8)

- イスラエルの手は暴力に、指は無益なものに、口は偽りに用いられていた。
- それは神様の御心からかけ離れた生活だった。

私たちの問いかけ

- 自分の手は平和を生み出しているか？
- 指は人々を助けるために用いられているか？
- 口は真実を語っているか？

2) 救いを求める者たちのうめき

イザヤ 59:9-15

- 公正と義がない状況で、イスラエルは光を求めたが暗闇に覆われていた。
- 真昼でも霊的にはつまずき、健康に見えても霊的には死人のようだった。

不正な裁判

- 裁判の場(広場)に真理がなく、不正な判決がなされていた。
- 弱者は公正な裁きを受けられず、悪人の餌食になっていた。

現代社会との共通点

- 日本の政治における横領問題など、現代にも不正があり、それを訴えても不起訴になることがある。
- 人間の力では公正も救いも実現できない。

3) 罪人の状況に心を痛み、救いを与える【主】

イザヤ 59:15b-16a

- 【主】は公正がないことに心を痛み、取り成す者がいないことに驚かれた。

取り成しの必要性

- 出エジプト記 32 章: モーセは永遠のいのちを賭けてとりなしているが、結果的には効果がなかった。
- 真の仲介者は人間には用意できず、【主】自身が救い主を備えられた(イザヤ 59:16b)。

【主】が行う二つのこと

1. 敵の討伐(イザヤ 59:17-19)
 - 【主】は戦士として、義の鎧や救いの兜を身にまとい、敵に報復する。
2. 贖い(イザヤ 59:20)
 - 【主】は贖い主として、キリストを与えて、罪人を買戻し、救いをもたらす。

唯一の仲介者: イエス・キリスト(I テモテ 2:4-7)

- 神は、すべての人が救われ、真理を知るようになることを望んでおられる。
- イエス・キリストは、神と人との唯一の仲介者であり、贖いの代価を払ってくださった。

結論)

- 困難な状況に置かれると、神様の存在や助けを疑うことがある。
- しかし、イザヤ書 59 章は、救いが来ないのは神様の力が足りないからではなく、私たちの罪が神様との間を隔てているからだとする。
- イスラエルのように罪深い歩みをしていないか、自分を吟味する必要がある。
- 【主】は憐れみ深く、私たちの救いのためにイエス・キリストを与えてくださった。
- 悔い改めて【主】に立ち返る者には、聖霊が与えられ、【主】の言葉を語れるようにされる。

適用の問いかけ

- たとえ困難な状況にあっても、神様を信頼しているか？
- 自分の罪を悔い改め、主イエス・キリストを信じ、救いを受け取る決心をしているか？
- 聖霊の導きに従い、真理を語る者として歩んでいるか？